釧路湿原のおかれている現状

干　場　豊　繁

新釧路川の左岸づたいに、十条製紙前から鶴居村にいたる旧道を車で五分も走ると目の前は広大な釧路湿原である。対岸の岩保木山と左手にどこまでも遠くにつづく五十石の山々を眺めながら温根内まで急ぐ、湿原の良く見える小高い丘の上に立つと、赤沼の向うには水を満々とたたえた雪裡川が、ようようと流れている。

五万分の一の地図をひろげてみると、眼下に開けている湿原の広さだけで約二万五千ヘクタールはある。これが阿寒町、鶴居村、標茶町、釧路村の各町村に入り込んでいる湿原と合わせると、全体で約五万五千ヘクタールの広大な面積になるのである。湿原は私達に美しい景観を見せてくれると同時に、また動植物の宝庫でもある。釧路地方に残された貴重なこの遺産を環境破壊から護り、自然のままにいつまでも残しておきたいと願っているのだが、私の心配をよそに、毎年開発はどんどん進められているのである。

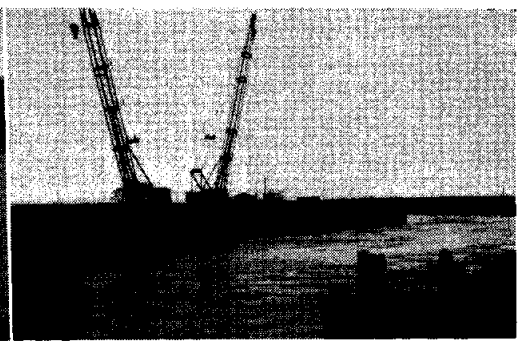
河川改修による環境破壊は進む

釧路川水系の主な河川は、オソベツ川、ヌマホロ川、久著呂川、チルアツナイ川、雪裡川、芦別川、幌呂川、温根内川、仁々志別川などであるが、河川改修の洗礼を受けない川は、ほとんどないほどである。

一昨年九月に転勤されたが釧路開建の針原部長に四回ほどお目にかかり、開発による弊害のこわさと、このまま開発が進められたらこの広大な湿原も半減してしまうでしょう、と熱っぽくいさがったことなどが思い出される。これには、部長もホトホト困ったようであった。

ここでその一端の幌呂川について紹介すると、この川は鶴居村上幌呂の上流にある新幌呂よりさらに八キロ上流の山間部から十数本の小川の水をかき集めて幌呂地区を通り、旧道沿いに流れ雪裡川に合流する、直線にして延長約三〇キロの割と大きい川だった。それが四十七年の農用地開発事業により、幌呂川の橋から温根内川の合流点まで直線五・五キロの間の川がなくなってしまったのである。そればかりでなく、その下流の捕獲場までの五・五キロもまた影響を受け川はあるが、それまであった平常水位の約五〇センチ下がり、橋より下流の湿地帯が約三〇〇ヘクタール干上がってきたことなどである。

この工事は国が八〇％費用分担し、道が一〇％、受益者一〇％負担し、幌呂地区の酪農家七十四世帯の営農の早期安定と自立農家の育成などを主目的とした事業であったが、幌呂川の橋のところで一メートル七〇センチまで水位を下げて、さらに二・四キロ下流の芦別川に切替えて合流させたも



〔右〕 セッツリ川に工事中のさけ・ます捕獲場〝止め〟の工場現場
〔左〕 メチャメチャに破壊された工事中のヌマホロ川下流

自然のままのコッタロ川とコッタロ湿原

ので、それが原因でその下流まで干上がってきたので、赤沼付近の高山植物群落や昆虫や動植物の分布に与える影響などが大きいのでないか、具体的には丹頂鶴の餌になっていたであろう下流一帯にいた蛙が、全然いなくなったことなどを説明し、もう一度、幌呂川の水を旧川に流入させて影響を受けた二キロの下流一帯をもとのような状態に生きかえらせていただきたいと、再三お願い申しあげたのであった。

昨春の豪雨と雪裡川の氾濫

湿原の中央部を流れる雪裡川も河川改良工事によって、原始河川の面影は跡形もなくなり、川の両側の森林は伐採されて味も素っ気もなく一直線になり、掘り進んだあとの土だけが高く盛上がっているだけである。直線になった川は水はけが良くなり、そのうえに幌呂川を合流させたのだから氾濫するのは当然であり、これら一連の工事と無関係ではないのである。

森林と河川の果たす約割の大きいのはいうまでもないが、第一に動植物の保護、酸素の大量供給、休養の場所と、水資源の涵養などであるが、開発された跡を見ると無残なもので、それらが充分に考慮されていないように見受けられるのである。春の大雨の時はわずか二時間くらいのうちに鉄砲水のような状態でみるみるうちに増水、旧ふ化場から下流はいたるところが決壊し、湿原全体が腰までつかるくらいに増水した（ただし三日間も降りつづいたときの湿原は、二メートルくらい水が上がったのである）。雨のあと一週間くらいしてから行ってみると、決壊した流れのあとや水たまりにおびただしいサケの稚魚が死んでいたのが見受けられたし、開発と保護の得失を考えると、これら一連の河川工事は間違っているようにも思えてくるのである。

絶滅寸前の「イトウ」を守ろう

われわれ人間は自然のバランスを崩し、地球上にかけがえのない多くの貴重な生物を滅ぼしてきた。一度失った生物は、二度と地球上にその姿を表わさない。その責任の重大さに気づき、いろいろと保護の手がさし延べられている。丹頂鶴はもちろんのこと、沖縄県のノグチゲラやイリオモテヤマネコ、本土ではニホンカモシカを守ろうと保護基金が設立され、生息地の環境保全などの対策がとられるようになった。

サケの大豊漁とまぼろしのイトウ

一昨年のサケ漁は史上最高の大豊漁で、千四百万匹に達したという。それにひきかえ、道東の各河川に数多く棲息していた「イトウ」は、近年極端にその数が少なくなった。水産関係者にいわせると「イトウ」はサケ・マスの稚魚を喰う害魚だからという一言で片づけられてしまいそうだが、最近は、とみにその巨大な雄姿を見せなくなり、さびしい限りである。

「イトウ」の生態は、まだ解明されずナゾにつつまれた部分が多いが、とくに湿原の多い道東の河川に生息し、大きいのになると一・五メートルを越えるようになり、成長が遅く二〇年はかかるようである。

増殖事業と他の魚に与える影響

サケ・マスの人口ふ化を推し進めるために重要な役割を担っている捕獲事業についてであるが、五月中旬〜十一月末頃まで、〃止め〃を入れているが、目的のサケ・マスだけではなく、〃止め〃をくぐり抜ける小魚を除く他の魚も、すべてが通行止めになっているのである。これでは、人工的にふ化して保護されているサケやマスはいいとしても、保護されていない他の魚はそ上できず、絶滅に追い込まれるのは当然であり、せめて〃止め〃の上流にのぼらせるくらいの配慮をしてもらいたいことと、数少なくなった「イトウ」にも生存の権利があろうし、種族保存こそ自然の摂理に叶うものである。ただ単に、害魚だからといって無理に敵視し、「イトウ」の棲息地の破壊はおろか、乱獲などによって絶滅に追い込む危険だけは避けてもらいたいのである。

（道東経済出版社）